

国際理解教育に通じる小学校英語教育の 多角的視点からの研究と教材の開発

課題番号：09680240

平成9年度～平成10年度科学研究費補助金
(基盤研究(C)) 研究成果報告書

平成22年4月

研究代表者 園城寺 信一
元岩手大学・教育学部・教授

目 次

はしがき	1
I 国際理解と国際理解教育について	3
1. ユネスコの国際理解、国際理解教育の考え方	3
2. 人権と子ども	3
3. 国際理解教育と異文化理解教育	4
4. 国際理解・国際理解教育に関するアンケート調査	4
II 小学校における英語教育	13
III 小学校英語教育の期待と疑問	16
IV 中学校英語教師の小学校英語教育への反応	20
1. アンケート調査	20
2. 研究開発校出身者の特徴	20
3. 小学校への英語導入	21
4. 指導形態- ALT（英語指導助手）とJTE（日本人英語教師）の関係	22
5. 小学校英語教育への希望	23
6. 小学校と中学校の連携	23
7. 総括	24
8. 中学校英語教師のコメント	24
V 中学校英語と小学校英語の比較	36
VI 英語歌詞による歌唱と劇化のもたらす学習効果	48
1. 研究の目的	48
2. 研究の方法	48
3. 結果と考察	49
4. 今後の課題	58
VII 小学校英語教育における「歌」教材の可能性	60
1. 調査の大要	60
2. 多くの学校が選択した歌	60
3. 使用場面・使用目的別分類による教材名	62
4. 小学校音楽科教材との関連	65
5. 総評	66

VIII	現行音楽教科書のなかで扱われている教材について	67
	1. 音楽教科書の教材活用	67
	2. 市販教材の活用	67
IX	教材開発の視点	69
	1. 教材開発の核となるコンセプト	69
	2. 英語の発音に注目	69
	3. 差別語に注目	70
	4. 小学校の教科書に出てくる外来語の活用	71
	5. 外来語ダイナミズム覚醒のために	73
	おわりに	75
Appendix		
	I. アンケート調査	79
	II. 年齢別アンケート調査結果	87
	III. 海外経験の有無に基づくアンケート調査結果	97

は し が き

第二次世界大戦終結後長らく続いた冷戦構造の象徴でもあった「ベルリンの壁」が1989年に崩壊し、これによって東西対立に大局的には終止符が打たれたと言えるであろう。現実には各国内外において、民族闘争、民族自決の戦争、経済的紛争などが起ってはいるが、世界の国際化・グローバリゼーションは加速してきている。さらに、IT革命によって、この傾向は一層顕著になっていくであろう。

国際化にともなって、世界各国における外国語教育はどのように変化し、変質してきているのだろうか。

私は1979年、つまり冷戦中、ポーランドに教育視察に行ったが、そこではロシア語が初等教育から学習されていた。高校では英語が主流となり、週3・4時間LLなどで学習されていた。当時は東欧圏でも外国語としては、ロシア語とともにドイツ語・フランス語、そして英語が学習されていたのである。中国でも、細々と行われていた英語教育が、現在では小学校でも行われるようになり、EU各国の英語学習熱も10数年前から飛躍的に高くなってきている。英語は今や、賛否両論はあるにせよ、各国、各地域の言語と多少の妥協をしながら、コミュニケーションの手段としての国際共通語になりつつあることは厳然たる事実である。

一方、日本では公立小学校ではクラブ活動で英語を学んだり、国際交流活動を行うために極めて初歩的な英語を学んだりはしていたが、世界の英語学習の趨勢や、グローバリゼーションに伴って、国際理解に通じる外国語（英語）学習の必要性が認識されてきた。1992年、大阪府立真田小学校、大阪市立味原小学校が文部省の研究開発指定校となり、国際理解に通じる英語学習に関する先導的試行を行った。私は92年に両校を訪れ、授業を見学させていただいたが、楽しそうに英語を使って遊ぶ生徒たちの姿に喜び、驚嘆、羨望などが混在する一種独特な複雑な感慨をおぼえたのである。しかし、両校の授業では、ALTが主役、英語の副免を持った日本人の先生が脇役、クラス担任が黒子的な役割をしている、すなわち3人がかりで授業が進行していること、また、ALTの人柄にクラスの雰囲気はかなり影響を受けることに多少の不安を感じたのも事実であった。同時に、予算上、どの小学校でもこのような重層的な体制が取れるのだろうか、クラス担任とALTだけで授業が行えないものだろうか、担任だけではどうだろうか、などと考えたのであった。それ以後、研究開発指定校も増え、1999年まで62校が多角的な視点から、そしてそれぞれ独自の目標を持ち、種々の方略を用いて、国際理解に通じる英語教育を行ってきた。

私はその間、研究開発校の授業をできるだけ多く視察し、撮影し、また教材を研究してきた。同時に、金沢市や横浜市の国際理解の取り組みを視察させていただいた。そして、「国際理解（教育）について」「教師について」「国際理解に通じる小学校における英語教育について」等をテーマとしたアンケートを研究開発校の先生方、金沢市の小学校の先生方、多くの大学の教師や学生、一般人を対象に行い約3400人から回答を得た。

これらの回答を考察し、また私たち独自の研究の概要を述べ、21世紀における国際理解に通じる英語教育の指針の一部を提示したい。

なお、最後になったが、研究開発校の報告書を送っていただいた学校関係者、アンケートの回答をお寄せくださった方々、統計・整理などの面で協力していただいた八重樫由美、箱崎満美、伊藤奈美、大南典子、大沢重之、佐々木雅剛、熊谷一史、佐藤清彦の諸氏、そして、多くの事務的な部分を処理して下さった岩手大学教育学部関係事務職員の方々に深謝申し上げる。

研究組織

研究者代表 園城寺信一(岩手大学教育学部教授)

研究分担者 千々岩佳史(岩手大学教育学部助教教授)

研究分担者 丸山忠璋(横浜国立大学教育人間学部助教教授)

※所属・職名は研究期間終了時のもの

研究経費	直接経費	間接経費	合計
平成 9年度	2,200 千円	0 千円	2,200 千円
平成 10年度	1,100 千円	0 千円	1,100 千円
計	3,300 千円	0 千円	3,300 千円

研究発表

学術論文

- 1 差別用語と英語教育 1999年10月『岩手大学教育学部学会報告書 第14号』
園城寺信一 単著
- 2 小学校教科書に現れる生涯学習 2000年3月『STEP 英語情報』園城寺信一 単著
- 3 国際理解と小学校英語教育 1998年 『全国英語教育学会研究紀要』園城寺 信一
- 4 ALTとのチーム・ティーチング 1999年『JASTEC JOURNAL』園城寺 信一

I 国際理解と国際理解教育について

国際理解教育が、近年、日本の教育の中核となっていることは明らかである。しかし、国際理解教育とは何かと聞かれると、明確に答えられる人は多いとはいえない。国際理解教育については答える人の立場によってさまざまな解釈がされるし、また解釈できるからである。ただ、日本における国際理解、あるいは、国際理解教育についての考え方は、中央教育審議会当の答申から推測しても、ユネスコの解釈に沿っているのが実情であろう。そこで、まず、ユネスコの考え方を考察してみたい。

1. ユネスコの国際理解、国際理解教育の考え方

1994年の第18回ユネスコ総会において、その加盟国に対して「国際理解、国際協力及び国際平和のための教育ならびに人権及び基本的自由についての教育に関する勧告」を行ったが、同勧告は、国際理解のための教育政策の主要指導原則として、

- ①すべての段階及び形態の教育に国際的側面と世界的視点をもたせること。
- ②すべての民族、その文化、文明、価値及び生活様式(国内の民族文化及び他国民の文化を含む)に対する理解の尊重
- ③諸民族及び諸国民の間に世界的な相互依存関係が増大していることの認識
- ④他の人々と交信する能力
- ⑤権利を知るだけでなく、個人、社会集団及び国家にはそれぞれ相互に負うべき義務があることを知る。
- ⑥国際的な連帯及び協力についての理解
- ⑦ひとりひとりが、自分の属する社会、国家及び世界全体の諸問題の解決に参加する用意を持つことをあげている。

同勧告には「人権」という言葉はないが、その核となっているのは人権意識の涵養と尊重であろう。このような基盤の上に立って教育が行われ、生徒・学生も概念として理解、それに基づいて行動すれば世界平和と人類の福祉が実現できるであろう。

2. 人権と子ども

一言に「人権」といっても子どもたちにとっては理解しにくい。「人権」を子どもたちに理解させるには、現実生活中で考えさせることが肝腎である。アメリカ合衆国においては、極端な多民族国家であるという理由もあるが、小学校時代から人種差別(racism)や性差別(sexism)の廃絶を指向した厳しい指導が行われるが、これが人権教育であり、その教育の実際を知ることが、立派な国際理解教育になるであろう。

人種差別を例に取れば、後述する英語の歌の指導で“Ten Little Indians”がでてくるが、Indianが合衆国では、差別語とされていることを教えることによって「人権」について少しでも意識させることができるであろう。しかし、低学年・中学年の子どもの中にはそれでも分かりにくい概念であるに違いない。そのような場合には、「人間が人間らしく生きていける権利」とも説明できるが、「人間らしく」とはどのような現実的内容を持つかと問われれば、答えに窮することもあるだろう。ただ「生きる」だけで精一杯の人もおり、「人間らしく」の意味が何を具体的に意味するのかを納得させにくいこともあるだろう。だが、英語を通しての国際理解教育の中で辛抱強く教えていけばそのような環境

の中で子どもたちも「人間らしい生き方」に目覚めていき、それを目標とした自己実現に向かって一歩を踏み出していくことが出来るようになるであろう。

3. 国際理解教育と異文化理解教育

国際理解という言葉は、「国家・国民間の相互理解」を含意すると感ずる人が多いが、必ずしもそのような意味で用いられるとは限らない。しかし、昨今のように、国内での宗教対立や多民族国家内での民族対立に起因する混乱や騒動・戦闘などをみると、一つの国家を一般化して把握することは誤りである。むしろ、1 国家内には幾つかの文化が併存すると考えるのが妥当であろう。日本の場合を考えてみても、沖縄の文化と青森の文化は異文化であると言えるし、また、たとえば岩手県の場合でも、南部藩の伝統文化が息づく北部と伊達藩の伝統文化が息づく南部とは文化の違いが著しい。また、太平洋岸と秋田県、山形県側の文化も違うのである。国家を細分化すれば、1 国には幾つかの異文化が存在するのは当然である。このように、「国際理解教育」は、「異文化理解教育」と考える必要がある。それによって、異文化の共存、ひいては、諸国家の共存の道を理解させるべきであろう。ただし、本稿では「国際理解」に「異文化理解」を含意させたい。

4. 国際理解・国際理解教育に関するアンケート調査

1999 年 2 月に、下記のような依頼文で始まるアンケート調査を行った。

調査対象は次の通りである。

A グループは研究開発指定校の先生

B グループは金沢市の小学校の先生方

C グループは JACET (大学英語教育学会) の会員の先生方と先生方の教え子、家族、その他知人や知人の周辺の人たち

である。

ここでは、A グループの略称を A、B グループの略称を B、C グループの略称を C、そして全体 (A + B + C) の略称を W とする。

性別、年齢別、海外経験の有無などに基づく調査結果については、appendix を参考にして御賢察いただければ幸いである。

まず、依頼文を紹介する。

拝啓 立春の候、皆様には御清祥のことと存じます。

さて、私ども岩手大学園城寺信一、千々岩佳史、横浜国立大学丸山忠璋は、文部省科学研究費補助金を受け、研究課題「国際理解に通じる小学校英語教育の多角的視点からの研究と教材の開発」に取り組んでおります。

ご承知のこととは存じますが、2002 年から施行される新学習指導要領によると、小学校の場合、3 年生から「総合的な学習の時間」が設けられ、3・4 年には年間各 105 授業時間、5・6 年には各 110 授業時間が充てられることとなります。この「総合的な学習の時間」には、国際理解、情報、環境、福祉、健康などの課題、児童の興味に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題について活動を行なうこととなります。これらのうち、国際理解を目標とする活動の一つとして

英語学習があります。英語学習とはいつても、聞くこと（リスニング）と話すこと（スピーキング）が中心で、アルファベットなどは使わず活動することが原則と考えられています。

すでに、平成4年に大阪市立味原小学校と真田山小学校で、次いで千葉県東金市立鶴金小学校と鹿児島大学附属小学校でそれぞれ3年間の研究を開始しました。その後、各都道府県でもそれぞれ特色ある研究を行なっておりますが、3年間の研究期間が終わっても、独自に研究を継続している学校が大半を占めています。この他には、文部省の研究開発校としてではなく、金沢市や横浜市などのように日本人のボランティアなどを起用するというような独自の方法で研究実践を行なっているところもあるようです。

つきましては、国際理解に通じる小学校の英語教育に関していろいろ御質問させていただき、かつ御意見、御感想をお聞かせ下さいますようお願い申し上げます。いただいた御回答は、十分注意した上で、私どもの研究の一部に活用させていただくことを御了承ください。

最後になりましたが、皆様のご健康を心からお祈り申し上げます。

敬具

アンケート調査は約7000人に対して行なったが約3350人の回答を得た。その後も断続的に「遅くなりましたが・・・」という手紙を添えて回答をお寄せ下さった方がかなりいたが、残念ながら統計は間に合わなかったのが除外してある。

調査は2部に分けられる。

第一部は調査対象の性別、年齢、職業、学歴、海外留学、旅行、勤務 などについての調査である。

この調査の回答者の総数は約3350人、男女比は、男性が40%、女性が60%である。年齢は40代、30代が各約30%、20代が約20%である。職業は、小学校教諭が35%弱、中学校教諭が12%弱、大学教官が8%、大学生・専門学校生が8%弱、会社員・自営業が18%弱、専業主婦その他が22%強になっている。これによって直接教育に関係する人は約52%に達しており、調査によって現実の教育・実相を知る人たちの意見・感想を集約できていると考えられる。

なお、各調査項目において、考察の目安になるように人数・%が第1位あるいは第2位になるものに網かけをした。

第二部は、Questions 1(Q 1)、Questions 2(Q 2)、Questions 3(Q 3)についての調査である。

Q 1は国際理解（教育）について

Q 2は小学校英語教育の実施の際の陣容などについて

Q 3は小学校での国際理解（教育）の期待と疑問を、時期、賛否、教師の研修、レベルなどについて調査。

なお、第二部においては、W（A+B+C）はその必要性の程度を考慮して除外してある。

また第一部と同様に、各調査書項目について考察の目安となるように、第1位、あるいは第2位にあたるものに網かけがしてある。

以下、調査項目を提示し、考察してみたい。（なお、各調査項目において、10名前後の数の不一致が多少見られるが、それは無回答の所があったためである。）主として表を参照して、A～B～C～Wの順に人数・パーセントを入れる。

第一部

■まず、回答者の性別・年齢・職業などを教えていただいた。

(イ) 性別

選択肢	グループ・人数・%		A		B		C		W	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
男性	203	34.4%	76	26.9%	1,049	42.7%	1,328	39.9%		
女性	387	65.6%	207	73.1%	1,409	57.3%	2,003	60.1%		
合計	590		283		2,458		3,331			
分母	590		283		2,458		3,331			

(ロ) 年齢

選択肢	グループ・人数・%		A		B		C		W	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
60代	4	1%	0	0.0%	225	9.1%	229	6.8%		
50代	67	11.3%	51	18.0%	308	12.5%	426	12.7%		
40代	218	36.8%	124	43.7%	635	25.7%	977	29.2%		
30代	206	34.8%	83	29.2%	683	27.7%	972	29.1%		
20代	97	16.4%	26	9.2%	552	22.4%	675	20.2%		
10代	0	0.0%	0	0.0%	65	2.6%	65	1.9%		
合計	592		284		2,468		3,344			
分母	592		284		2,468		3,344			

(ハ) 職業

選択肢	グループ・人数・%		A		B		C		W	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
会社員	1	0.2%	0	0.0%	535	21.9%	536	16.1%		
自営業	0	0.0%	0	0.0%	55	2.2%	55	1.7%		
公務員 <small>小学校教諭</small>	30	5.1%	6	2.1%	125	5.1%	161	4.8%		
小学校教諭	523	88.3%	272	95.8%	127	5.2%	922	27.7%		
中学・高校教諭	16	2.7%	0	0.0%	362	14.8%	378	11.4%		
大学教官	0	0.0%	0	0.0%	265	10.8%	265	8.0%		
大学・専門学校生	0	0.0%	0	0.0%	263	10.7%	263	7.9%		
専業主婦	5	0.8%	0	0.0%	371	15.2%	376	11.3%		
その他	17	2.9%	6	2.1%	344	14.1%	367	11.0%		
合計	592		284		2,447		3,323			
分母	592		284		2,447		3,323			

(二) 最終学歴

選択肢	グループ・人数・%		A		B		C		W	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
中学	2	0.3%	0	0.0%	15	0.6%	17	0.5%		
高校	7	1.2%	2	0.7%	270	11.2%	279	8.5%		
短大	82	13.9%	4	1.4%	260	10.8%	346	10.5%		
大学	494	83.4%	269	96.4%	1,413	58.5%	2,176	66.2%		
大学院	7	1.2%	4	1.4%	458	19.0%	469	14.3%		
合計	592		279		2,416		3,287			
分母	592		279		2,416		3,287			

(ホ) 海外留学・旅行・勤務などの経験がありますか。

選択肢	グループ・人数・%		A		B		C		W	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
ある	434	73.3%	178	62.7%	2,051	83.2%	2,663	79.7%		
ない	158	26.7%	106	37.3%	415	16.8%	679	20.3%		
合計	592		284		2,466		3,342			
分母	592		284		2,466		3,342			

(へ) (ホ) で「ある」と答えた方にお聞きします。

1. 何回ぐらい外国へ行ったことがありますか。

選択肢	グループ・人数・%		A		B		C		W	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
1回	150	34.2%	67	36.8%	327	15.9%	544	20.3%		
2回	98	22.4%	47	25.8%	312	15.1%	457	17.0%		
3～5回	136	31.1%	54	29.7%	612	29.7%	802	29.9%		
6回以上	54	12.3%	14	7.7%	810	39.3%	878	32.7%		
合計	438		182		2,061		2,681			
分母	438		182		2,061		2,681			

2. 目的をお教えてください。(複数回答可)

選択肢	グループ・人数・%		A		B		C		W	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
留学	18	3.0%	6	2.1%	523	21.2%	547	16.3%		
海外勤務	15	2.5%	4	1.4%	306	12.4%	325	9.7%		
海外旅行	428	72.1%	176	62.0%	1,908	77.3%	2,512	75.1%		
合計	461		186		2,737		3,384			
分母	594		284		2,469		3,347			

3. 外国にいた時、英語をどのくらい使いましたか。

選択肢	グループ・人数・%		A		B		C		W	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
普段からコミュニケーションをとるためにしばしば使った	55	12.3%	15	7.9%	866	40.0%	936	33.4%		
買い物とか電話など必要に応じて使った	131	29.2%	56	29.5%	641	29.6%	828	29.6%		
ジェスチャーなどを交えながら少し使った	183	40.8%	85	44.7%	446	20.6%	714	25.5%		
ほとんど使わなかった	79	17.6%	34	17.9%	210	9.7%	323	11.5%		
合計	448		190		2,163		2,801			
分母	448		190		2,163		2,801			

(ト) 得意な英語の技能は何ですか。(複数回答可)

選択肢	グループ・人数・%		A		B		C		W	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
聞くこと	121	20.4%	39	13.7%	630	25.5%	790	23.6%		
話すこと	70	11.8%	22	7.7%	490	19.8%	582	17.4%		
読むこと	196	33.0%	94	33.1%	1,341	54.3%	1,631	48.7%		
書くこと	51	8.6%	15	5.3%	394	16.0%	460	13.7%		
合計	438		170		2,855		3,463			
分母	594		284		2,469		3,347			

(チ) 日常英語の中での英語についてお知らせください。(複数回答可)

選択肢	グループ・人数・%		A		B		C		W	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
しばしば、英字新聞・雑誌・漫画などを読むことがある	27	4.5%	7	2.5%	720	29.2%	754	22.5%		
テレビ・ラジオ・音楽などで直接英語を聞くことがある	246	41.4%	65	22.9%	1,363	55.2%	1,674	50.0%		
たまたま、自分の英語を試すような気持ちで、英語の4技能を使うことがある	91	15.3%	20	7.0%	422	17.1%	533	15.9%		
たまたま、子供たちに英語を教えることがある	287	48.3%	55	19.4%	356	14.4%	698	20.9%		
英語に自信がないのでほとんど使わない	187	31.5%	175	61.6%	836	33.9%	1,198	35.8%		
合計	838		322		3,697		4,857			
分母	594		284		2,469		3,347			

第二部

■Questions

Q1 小学校英語教育は、「国際理解に通じる」ものでなくてはなりません。すなわち教育目標は、「国際理解」になります。そこで「国際理解」と「国際理解教育」に関してのお考えをお教えてください。

(イ) 私が以前、大学生や社会人に対して行った調査によりますと、「国際理解」に関して下記のような意見が出て参りました。この中から、皆様の国際理解に関してのお考えに当てはまるものをお教えてください。(複数回答可)

選択肢	グループ・人数・%		A		B		C	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
① 各国、各民族の生活・思想・歴史・伝統・価値観の相違を理解すること。	467	78.6%	236	83.1%	2,651	79.2%		
② 世界や各国の政治情勢を的確に把握すること。	66	11.1%	32	11.3%	715	21.4%		
③ 各国、各民族の平和共存のため、親善・友好に努力すること。	269	45.3%	128	45.1%	1,405	42.0%		
④ 相互理解に基づき、文化面・経済面で均衡をとれた交流をすること。	123	20.7%	67	23.6%	873	26.1%		
⑤ 自国にとらわれず、地球の未来を考えること。	232	39.1%	129	45.4%	1,225	36.6%		
⑥ 人間としての共通性と、国や人種の独自性を認識し、理解しあうこと。	465	78.3%	213	75.0%	2,392	71.5%		
⑦ お互いの立場・人格を尊重し、広く、かつ深い人間関係を築くこと。	438	73.7%	191	67.3%	1,923	57.5%		
⑧ その他	30	5.1%	5	1.8%	366	10.9%		

【考察】

「国際理解」に関しては、人権と平和がその理解目標になるべきなのだが、回答項目には明示しなかった。③には「平和共存」という表現があるが、この項目が、「平和」に近く、⑥、⑦が「人権」に近い意味を持つと考えれば、「人権」尊重の精神を重視する人が多いことを示しており、日本にも人権意識が定着しつつあることが推察できる。ただ、自国を超越したより大きなグローバルな視点から「国際理解」を見る人が比較的少なかったのは「国際」という言葉の解釈に戸惑ったからだろうか。

総じて、①、③、⑦を包括したものが、大多数の回答者の国際理解に関する共通意識と考えられる。

(ロ)「国際理解」のためになすべきことをお教えてください。(複数回答可)

選択肢	グループ・人数・%		A		B		C	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
① 国際共通語として考えられる英語をマスターし、実用に役立てる。	166	27.9%	80	28.2%	1,348	40.3%		
② 外国への留学・旅行によって、外国での生活を体験する。	126	21.2%	78	27.5%	1,098	32.8%		
③ 新聞・テレビのニュースや、各国の現状を紹介する報道を見たり聞いたりして、国際情報を理解する。	247	41.6%	128	45.1%	1,655	49.4%		
④ 他国の歴史・風土・文化・宗教・習慣・社会環境などを研究する。	209	35.2%	85	29.9%	1,374	41.1%		
⑤ 自国の歴史・風土・伝統に愛情を持ち、また生活にも関心を持つ。	404	68.0%	173	60.9%	1,924	57.5%		
⑥ 自国の状況・立場を正しく理解してもらうために、PRを積極的に行なう。	43	7.2%	18	6.3%	410	12.2%		
⑦ 在日外国人との交流の機会を作り、積極的に活動する。	271	45.6%	134	47.2%	1,303	38.9%		
⑧ 既成概念や偏見を捨て、人権尊重の精神を涵養し、広い視野から助け合う。	362	60.9%	158	55.6%	1,724	51.5%		
⑨ その他	14	2.4%	11	3.9%	290	8.7%		

【考察】

⑤における回答は、日本人としてのアイデンティティの確立の必要性を示していると考えられる。日本人としてのアイデンティティを確立できれば、より深い異文化理解ができるのは当然だが、異文化理解に立ち向かって初めて日本人としてのアイデンティティの確立の必要性を感じ、自覚して日本理解に努力することになっても一向に差し支えないと思う。なお、⑧を選んだ人も多いことから、人権尊重の精神の重要性を認識している人が多いことがわかり、心強い。

小学校の先生方が、在日外国人との交流意義をかなり高く評価したのに対し、回答者Cがマスコミの報道の理解を重視していることは、両者の立場を鮮明にしているようだ。

(ハ)「国際理解教育」とはどのようなことだとお考えですか。皆様のお考えに当てはまるものをお教えてください。(複数回答可)

選択肢	グループ・人数・%		A		B		C	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
① 各国の生活・政治などを、歴史・文化などを通して多角的に考察し、相手の立場に立って考えられるようにすること。	449	75.6%	215	75.7%	2,395	71.6%		
② 各国の特殊性を踏まえた上で、各国の問題を全世界規模でとらえ、個人個人が問題解決について考える力を養うこと。	196	33.0%	98	34.5%	1,272	38.0%		
③ 世界の現状を、マスメディアや世界の歴史の学習を通して教えること。	77	13.0%	48	16.9%	763	22.8%		
④ 異文化を知るため、また意思疎通のために外国語を習得させること。	146	24.6%	52	18.3%	1,054	31.5%		
⑤ 外国人との交流、留学生の派遣・受け入れを行なうこと。	145	24.4%	59	20.8%	1,037	31.0%		
⑥ 国際交流で働ける、世界的視野を持った人間を育成すること。	254	42.8%	121	42.6%	1,328	39.7%		
⑦ その他	25	4.2%	7	2.5%	264	7.9%		

【考察】

①が突出している。質問の内容が包括的で選びやすかったのかもしれないが、②を選んだ人が多いことは心強い。また、A、B、C共に③の世界的視野をもった国際人の育成を第2位に選んだことも評価に価する。

(二) 小学生にとっての国際理解とはどのようなものとお考えですか。(複数回答可)

選択肢	グループ・人数・%		A		B		C	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
① 異文化に関する題材に触れて、それを理解すること。	370	63.3%	188	66.2%	2,106	62.9%		
② 日本人としての意識を強く持って、異文化を観察・理解すること。	119	20.0%	41	14.4%	706	21.1%		
③ 異文化に触れて、日本文化とどちらが正しいか、あるいは優れているかを理解すること。	10	1.7%	5	1.8%	61	1.8%		
④ 英語を学習する過程で、異文化に対して自ら考え、主体的に判断し、行動すること。	192	32.3%	58	20.4%	925	27.6%		
⑤ 外国人と協調したり、思いやる心が育つこと。	381	64.1%	166	58.5%	1,700	50.8%		
⑥ 英語という言語を習い、知り、使うだけでも国際理解になる。	67	11.3%	27	9.5%	425	12.7%		
⑦ 外国人と英語を用いて少しでもコミュニケーションがとれれば、そこで国際理解になる。	154	25.9%	64	22.5%	738	22.0%		
⑧ その他	42	7.1%	10	3.5%	417	12.5%		

【考察】

①、⑤が多く③が極端に少ないことは、研究開発を実際に行った先生方の視野の広さを示すものとして高く評価したい。また、A、B、Cグループは共に①、⑤を重視しているが、Aグループが④を3位に選んでいることは、研究開発校の先生方が自らの指導体験から得た自覚に基づくものであろう。

(ホ) 小学生の国際感覚を構成する要素とはどのようなものとお考えですか。(複数回答可)

選択肢	グループ・人数・%		A		B		C	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
① 興味・関心	491	82.7%	221	77.8%	2,828	84.5%		
② 精神のしなやかさ	204	34.3%	125	44.0%	1,206	36.0%		
③ 表現力	388	65.3%	147	51.8%	1,469	43.9%		
④ 個性	110	18.5%	45	15.8%	667	19.9%		
⑤ 自己主張	64	10.8%	39	13.7%	437	13.1%		
⑥ 歴史認識	49	8.2%	43	15.1%	529	15.8%		
⑦ チャレンジ精神	296	49.8%	93	32.7%	1,294	38.7%		
⑧ 寛容さ	155	26.1%	75	26.4%	814	24.3%		
⑨ 攻撃的な精神	1	0.2%	1	0.4%	11	0.3%		
⑩ その他			2	0.7%	82	2.4%		

【考察】

①の興味・関心は、「好奇心」に連なるものであり、教師が生徒に「好奇心」を積極的に持つことを期待していることをうかがわせる。また、③の表現力では、単に英語だけではなく、母国語でも自己表現力の養成を強く期待していることを表していると考えられる。

また、A、B、Cグループが共通して②、⑦で精神的な柔軟性や積極性を評価していることにも注目したい。

(へ) 小学生の国際理解教育は、具体的にどのようなことをすればよいとお考えですか。
(複数回答可)

選択肢	グループ・人数・%		A		B		C	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
① 挨拶、紹介、天候、買物、道案内など、日常生活に身近で関係ある英語表現を教える。	336	56.6%	131	46.1%	1,547	46.2%		
② 誉め言葉、お礼の言葉、繋ぎの言葉などの英語表現を教える。	110	18.5%	29	10.2%	430	12.8%		
③ 外国の風俗・習慣を絵で示し、簡単な英語で説明し理解させる。	110	18.5%	61	21.5%	911	27.2%		
④ ボディ・ランゲージを教え、ジェスチャーを取り入れて英会話をさせてみる。	270	45.5%	89	31.3%	976	29.2%		
⑤ 常に世界地図を教室内に掲示し、授業中に説明したり、授業時間以外でも見せるようにする。	74	12.5%	36	12.7%	680	20.3%		
⑥ 世界各国の遊びを英語を用いて楽しんだり、英語で歌を歌わせたりすること。	323	54.4%	102	35.9%	1,497	44.7%		
⑦ 外国人と直接交流する。	456	76.8%	223	78.5%	2,304	68.8%		
⑧ その他	47	7.9%	13	4.6%	452	13.5%		

【考察】

A、Bグループの4分の3の先生が、⑦の「外国人と直接交流する」を選んでいるが、生徒が、片言?の英語でALTと楽しげに会話しているところを見ると、ALTの存在の重要性を実感するのだと思う。また、Aグループで①、⑥を選んだ先生が50%を超えているが、種々の適応能力を持った生徒に過大な負担をかけず、英語で楽しむことを期待していることを示している。小学校レベルでは、これで十分だと思う。

II 小学校における英語教育

2002年から施行される小学校の指導要領には「総合的な学習の時間」の導入が規定されている。学習指導要領によると、第1章：総則 第3「総合的な学習の時間の取り扱い」の(3)には、「国際理解に関する学習の一環としての外国語会話とを行うときは、学校の実態に応じ児童が外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れ親しんだりするなど、小学校段階にふさわしい体験的な学習が行われるようにする」という記述がある。

この記述のキー・ワードとしては「国際理解」「外国語会話」「外国の生活や文化」「体験的な学習」と考えられるが、実質的には「外国語(英語)会話」を実際に外国人を交えて行う外国の生活や文化に触れ、国際理解への一助とするということになるであろう。

問題は、「体験的な学習」である。研究開発校では、「体験的な学習」においてALTが大きな役割を果たしているが、日本の経済状態で、果たして十分なALTを小学校に派遣できるのかという疑問が残る。勿論、金沢市のように日本人のボランティアを積極的に起用してかなりの成果をあげていることも事実であるが、ボランティアがほとんどいない地域もあるであろう。

「体験的な学習」が外国人との直接の会話のレベルから、日本人の先生との英語会話でも悪くはないが、外国人自身が「文化」である、あるいは「文化を運ぶ人」と考えると先生にも生徒にも不満が残るであろう。

Q2 小学校英語教育では、HRT (Home Room Teacher 学級担任) が指導にあたる場合もありますが、その他にJTE (Japanese Teacher of English 日本人の英語教師)、ALT (Assistant Language Teacher 英語指導助手)、あるいは金沢市で採用している免許がなくても教壇に立てる特別非常勤制度によるEAA (English Activity Assistant 英語活動助手) などが参加する場合があります。そこで、指導者について御意見をお聞かせください。

なお、HRTは日本人の教師、JTEは英語を専門とする日本人の教師、ALTは英語を自由に使用できる能力を持った外国人教師、EAAは普通、教員の免許がなくとも英語の運用能力を持つ日本人の非常勤のボランティア的教師と考えていただきたい。

(イ) 指導者の組み合わせは次のうちどれが良いと思いますか。

選択肢	グループ・人数・%		A		B		C	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
① HRTのみ	3	0.5%	2	0.7%	39	1.2%		
② HRT+JTE	20	3.2%	8	2.8%	188	6.0%		
③ HRT+ALT	247	39.6%	85	30.1%	768	24.5%		
④ HRT+JTE+ALT	262	42.1%	36	12.8%	839	26.7%		
⑤ HRT+EAA	17	2.7%	61	21.6%	383	12.2%		
⑥ HRT+EAA+ALT	74	11.9%	90	31.9%	921	29.3%		

【考察】

Aグループにおいては③と④の賛成者がそれぞれ40%を占め、ALTの存在を何らかの理由で必要としていることがわかる。

日本人のEAAには英語力も指導力もある人が多いのだが、子どもたちがALTとの直接の交流をいかに楽しみにしているかが伝わってくる。また、逆に①、②、⑤を選んだ先生が極めて少ないことは、日本人だけでこの時間を運営していくのはかなり難しく、日本人だけで授業を行う際の精神的な負担の大きさが想像できる。

(ロ) もしあなたが上記の EAA になることを要請されたら、やってみたいと思いますか。

選択肢	グループ・人数・%		A		B		C	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
① やる気がある。	176	34.9%	25	10.5%	1,083	37.7%		
② 気乗りがしない。	329	65.1%	213	89.5%	1,793	62.3%		

【考察】

Aグループの研究開発校で、HRTとして英語授業で活躍している先生方でも、EAAとして英語を教えたくないということから、EAAに期待される精神的もしくは肉体的負担の大きさが想像できる。また、現実にEAAと共に授業しているBグループの先生方の90%がEAAになることに消極的であるということは、EAAに期待されている働きが本人たちには過重であるということ、意味すると考えられる。

確かに、Aグループの約3分の1の先生は授業に自信を持っているか、授業を楽しみにしていると考えられ、頼もしいことではあるが、英語を専門とする教師が小学校英語教育を十分に研究し、小学校で教えることが望ましいのではないか。小学校の全教師に「英語の過重な負担」を与えるのは避けるべきであろう。

(ハ) EAAとして働くとしたら、最低限どの程度英語ができ、生きた英語を話せばよいと思いますか。(3つまで回答可)

選択肢	グループ・人数・%		A		B		C	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
① 中学英語が大体理解できればよい。	158	26.6%	35	12.3%	603	18.0%		
② 英語の語句・構文などについて説明できる程度がよい。	45	7.6%	10	3.5%	334	10.0%		
③ 日常生活で用いる英語が話せばよい。	418	70.4%	180	63.4%	2,016	60.2%		
④ 音声指導に関して、多様な説明が正しくできること。	166	27.9%	95	33.5%	1,178	35.2%		
⑤ 英語検定試験で準1級程度の成績がとれればよい。	62	10.4%	41	14.4%	590	17.6%		
⑥ TOEFL 試験で、500点以上の力がある人がよい。	31	5.2%	12	4.2%	464	13.9%		

【考察】

③の日常生活で用いる英語が話せばよいとする先生方が約70%いるが、これぐらい度胸があればさらに実力をつけ、充実した指導ができそうである。

⑤、⑥の実力がある人は、中学の教師になれる可能性があるといえるが、小学校における指導者としては頼もしい存在になるであろう。

(二) EAA の性格の必要条件は、次のようなものが考えられますが、この中でぜひとも必要であると思われるものを3つ選んでお書きください。

選択肢	グループ・人数・%		A		B		C	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
① 明朗闊達な人	307	51.7%	149	52.5%	1,430	42.7%		
② チャレンジ精神に富んだ人	182	30.6%	41	14.4%	688	20.6%		
③ 落ち着いている人	15	2.5%	12	4.2%	104	3.1%		
④ 一人一人の生徒に気配りし、個を大切にできる人	220	37.0%	109	38.4%	1,455	43.5%		
⑤ 教えるというよりも共に学習しようとする姿勢がとれる人	289	48.7%	119	41.9%	1,381	41.3%		
⑥ 生徒の興味・関心を理解し、それを伸ばす努力のできる人	365	61.4%	168	59.2%	2,337	69.8%		
⑦ 創意工夫によって積極的に教材開発のできる人	111	18.7%	47	16.5%	687	20.5%		
⑧ その他	24	4.0%	11	3.9%	325	9.7%		

【考察】

A、B、Cグループ共に⑥を第1位に選んでいるが、常識的ではあるが健全な選択と言えるだろう。

これに対し、A、Bの小学校の現役の先生が①の「明朗闊達な人」を第2位に選んでいるのに対し、Cグループが「生徒の気配りができ、個を大切にできる人」を選んでいるのは興味深い。

生徒を学校という環境の中で生徒と接触する先生と、その他の環境の中で生徒と接したり、観察したり、また観念的に生徒を捉えたりするCグループとの見解の相違が垣間見るようである。